



Title	スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマン）を読む（その3）
Author(s)	長嶋, 美織
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 35, 95-106
Issue Date	2022-11-17
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88242">http://hdl.handle.net/2115/88242</a>
Type	bulletin (article)
File Information	06_nagashima_no.35.2022.pdf



[Instructions for use](#)

## スタディ・クエスチョン で読む古典

『現実の社会的構成』

(バーガー&ルックマン)を読む(その3)

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授

長島 美織

Reading Classics through Study Questions:  
“The Social Construction of Reality: A Treatise  
in the Sociology of Knowledge” by Peter L.  
Berger and Thomas Luckmann (Part3)

NAGASHIMA Miori

abstract

This is the third part of a series of attempts to propose and demonstrate a new method of reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to grapple with. The proposed ‘Study Question Method’ helps students read through and understand the target academic manuscript precisely and critically. The sample piece selected in this series of essays is “The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge”, by Peter L. Berger and Thomas Luckmann. The paradigm introduced in this book later got to be known as social constructionism and has made a big influence on not only sociology but also other academic fields such as psychology, pedagogy, gender study, and science in nursing. This part 3 examines Chapters 3 of the Part I, which deals with the interactions between everyday knowledge and languages. It consists of study questions, and corresponding answers and comments.

## 1 読解題材としている書籍とスタディ・クエスチョン・メソッドについて<sup>1</sup>

このシリーズで取り上げている古典は、Peter L. BergerとThomas Luckmannによる『The Social Construction of Reality——A Treatise in the Sociology of Knowledge』という書物で、1966年にアメリカで原著が出版されています。その後、1977年に最初の日本語訳が出版され、さらに、2003年に、『現実の社会的構成—知識社会学論考』という、より英語の原題に近いものに改題され現在に至っています。ここでは、2007年の新版第3刷を使用しています。以下で対象書籍の著者たち、つまり、Peter L. BergerとThomas Luckmannを指す場合には、B&Lという表記を用います。また以下の引用は、ことわりのないかぎり、この対象書籍からのものとなります。

さて今回も、スタディ・クエスチョン・メソッド (Study Question Method) を用いて読解を続けていきますが、(その1)<sup>2</sup>と(その2)<sup>3</sup>に引き続き、(その3)では、第I部の最後の章を読んでいくことになります。第I部は、「日常生活」という舞台を新しい知識社会学の領域として設定するために必要な基本的な概念や前提を、丁寧に確認している部分です。第1章では、意識の指向性と現象の多元性、そしてそれに伴う日常生活のさまざまな現実とその飛び地を行き来するまなざしの転換について読み解きました。そして第2章では、日常生活の中でも直接的な形で私たちの前に現れる対面的状況に焦点をおき、そこでの社会的相互作用の基本的性質について確認しました。対面的状況における〈ここといま〉、そしてその中で取り交わされる間主観性と相互作用について、典型的図式による認識のスペクトラムの中で、対面的状況の持つ特徴を洗い出しました。さらに、この対面的状況から抽象的な状況に拡大される際の匿名性の含意、時間という枠組みの持つ強制力と高度な匿名性が時にもつ影響力の強さという点も指摘されていました。このような考察の中で、たびたび言及されてきたのは、ことばが日常生活にもたらす秩序についてです。ということで、今回は、この点に焦点を当てた第3章の読解となります。

▶1 本稿が依拠するスタディ・クエスチョン・メソッドのよりくわしい説明は、以下の研究ノートを参照して下さい。

長島美織, 2017, 「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」(マンハイム)を読む—(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70, 「保険とリスク」(フランス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1: 第1段落から第4段落: insuranceについて』『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24: 109-124。

▶2 ここで(その1)とは、以下の研究ノートを指します。長島美織, 2021, 「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』(バーガー&ルックマン)を読む(その1)」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』33: 85-96。

▶3 ここで(その2)とは、以下の研究ノートを指します。長島美織, 2021, 「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』(バーガー&ルックマン)を読む(その2)」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』34: 35-46。

## 2 「第3章 日常生活におけることばと知識」の読解

第3章は、「ことば」を中心軸として、日常生活における知識の基礎を掘り下げていきますが、その冒頭はかなり難解な書き方で始まります。まずは、そこを読み解いてみましょう。

**SQ** この章の冒頭の一文、「人間の表現行為は客観化が可能である」(53)はどのような意味でしょうか。その後提示されている例も含めて説明し

なさい。

該当の部分をまず読んでみましょう。

「人間の表現行為は客観化が可能である。つまりそれは、その表現を生み出した人と他者の双方にとって、共通の世界における要素として近づきうる人間的行為の産物のなかに、みずからを顕現することができる。こうして客観化されたものは、その創造者の主観的過程を示す多かれ少なかれ持続的な標識として役立ち、その過程の理解可能性が直接的に理解しうる対面的状況の範囲を超えて拡大していくことを可能にする。」(53)

このように難解な文章が続く場合には、まず、構造的に読み解いていきましょう。構造的に読み解くというのは、接続詞（この場合は、「つまり」）や、文の構造に注目して、読み解いていくやり方です。例えば、第2文は、「つまりそれは、」で始まりますから、第1文のテーゼを言い換えているのだ、ということがこれだけでわかります。ということは、「その表現を生み出した人と他者の両方にとって、共通の世界における要素として近づきうる人間的行為の産物のなかに、みずからを顕現すること」の部分が、「人間の行為の客観化」という部分に対応することがわかります。

ちなみに、第1文と第2文を改めて比べてみると、最後の部分が、「(…が)可能である」と「(…ことが)できる」ということで、まさに言い換えになっていることがわかります。

となると、

「人間の表現行為の客観化」＝

「その表現を生み出した人と他者の両方にとって、共通の世界における要素として近づきうる人間的行為の産物のなかに、みずからを顕現すること」

ということがわかります。ただ、今回は、なかなかハードルが高いです。これだけでは、まだ理解がおぼつきません。先を読み進めましょう。

「こうして」で始まる第3文は、文末がまた、「可能にする」と可能性を明示して終わっていますので、その前の形式名詞句の中に埋め込まれている動詞に注目します。そうすると、この第3文は、客観化されたものがどうなるのか、というそちらの性質を描き出しているのだとわかります。ここで、形式名詞節の中で、動詞句が2つ並列に結ばれていますので、そこにも注意します。そうすると、この文が、「こうして客観化されたものは、」「持続的な標識として役立ち」、「対面的状況の範囲を超えて拡大していく」と、客観化されたものの性質について述べていることがわかります。

このように分析して読んでくると、第1文で述べられたテーゼ「人間の表現行為は客観化が可能である」ということは、以下のような意味を持つということがわかってきます。

1. その表現をした人に加えて、周りの人からも、確かめられる
2. 持続性がある
3. 対面的状況を超えている

ここまでのところで、表現行為がこのような性質を持った時、それは、客観化しているということができると理解できます。この理解は、さらに続けて述べられている「怒り」の例によって、より明確になります。

「怒り」という主観的な感情は、対面的状況のもとでは、顔つきや声のトーンなど身体的兆候で感じ取られることが多いのですが、これは、持続されません<sup>4</sup>。しかし、その「怒り」がナイフといった象徴的な武器で表される時、その怒りの表現は、客観化されます。ここでの例は、ベッドの壁に刺さっているナイフですが、この物体としてのナイフは、それを突き刺した人の「怒り」を表現しており、さらに、当事者以外が確かめることも可能で、持続性があり、対面状況を超えているという点で、上にまとめた「客観化」の条件を満たしています。よって、客観的な人造物は、それが伴う用途や形状とともに、その提示のされ方によって、人の感情といった主観的なものを表すこともできるというわけです。

「したがって、武器とは人間の産物であると同時に、人間の主観性が客観化されたものでもあるわけである。」(54)

**SQ** 次の段落(54)では、人類学者や考古学者を例に、表現行為の客観化についてさらに論じています。この例の意味を説明してください。

B&Lは、ここまで、人間の表現行為の客観化について語ってきましたが、この段落では、さらにその主張を「日常生活の現実」という彼らの主題と結びつけ、増強しています。日常生活の現実とは、このような客観化された事物によって充たされているだけでなく、こうした客観化された事物によってのみ、日常生活は可能であると述べていることに注目しましょう。つまり、「私」にとって、周りの環境が日常化するという事は、周りの事物の主観的意図のほとんどを把握している環境であるということに他なりません。それは、海外での生活など慣れない環境での生活ということを考えてみたらよりはつきりするでしょう。周りの事物の主観的意味、それは単純にいえば用途ということも含むものですが、それを理解できない事物に遭遇することが、慣れない環境では度々起こります。そして、それがなくなった時、その生活に慣れたと感じることになります。

考古学者や人類学者はより隔絶した日常生活の構築を古い事物から、再現しようとしています。この考古学者や人類学者という専門家の手による再現可能性と客観化された表現行為の持続性のことをB&Lは以下のような文章で語っています。

「…古い陶器の破片から数千年も前に滅び去ったかも知れない社会に住んだ

▶4 もちろん、相手やその場にいた人は、それを何度も思い出すことによって、持続的に体験し続けることはできますが、これは本書で述べようとしていることとは別の現象となります。

人間の主観的意図を再構成することができるという、他ならぬこの事実こそが、人間によって客観化されたものもつ持続的な力を雄弁に物語っている。」(55)

そして、ナイフが道具としては、切る、皮をむくなどの使用法を持っているのに対して、意味としては、敵意や殺意を意味することに使用することも可能であることから分かるように、客観化に伴う意味づけの範囲は、かなり広いということが言えます。B&Lの表現によると、「客観化されたある種の事物については、その道具的な使用と意味づけ的な使用との間にかなりの流動性がある」(56)ということになります。

このように表現行為の客観化という視点を徐々に拡大していく中で、出てくるのが、記号という重要な概念です。

**SQ** 「記号」はどのような点で、これまで述べてきた主観的意味を担っている事物と異なるのでしょうか。その特徴を表すキーワードとともに説明しなさい。

まず、B&Lの表現で、客観化と記号の関係を見ておきましょう。

「客観化という行為の特殊な、しかし決定的に重要な一つのあらわれは、意味づけるといふ行為、つまり人間による記号の創造という行為である。記号は主観的意味の標識として役立つとするその明白な意図によって、客観化された他の事物から区別することができる。」(55)

記号の存在意義は、主観的意味の標識としての役割だと述べられています。記号には、身振りなどの身体記号や音による記号体系、そして、シンボルによる記号などさまざまなものがありますが、「記号や記号体系は〈ここといま〉の主観的意図の表現を超えて客観的に通用する」、という点において、それらはまさに客観化過程を究極に押し進めたものと考えられます。こうして、記号は、〈ここといま〉でのみ可能だった直接的な主観的表現からの、〈分離可能性〉を獲得するわけです。したがって、記号は、主観的意味を担う標識(55)として機能するが、主観性の直接的状況からの分離可能性を(程度の差はあるにせよ)持っている、ということができます。記号の恣意性(記号と意味を結びつける必然的理由はない)です。

ということで、満を持して、ここで「ことば」についての議論が始まります。まず、57ページから59ページまでの議論を簡単にまとめておきましょう。

- ・ことば＝音声記号の体系として定義できる(57)
- ・ことばは人間社会の中の最も重要な記号体系である(57)
- ・ことばは対面的状況の中にその起源をもっているが、その場から分離可能である(57)

先に見たように、「記号と記号体系はすべて〈分離可能性〉という特徴をもっている」わけですが、「ことばの分離可能性はもっと基本的に、〈ここといま〉の主観性の直接的表現以外の意味を伝達することができるという、その能力にある」(58)とB&Lは述べています。また、心理カウンセリングなどの意義にもつながることとして、言葉という手段を用いて、客観化するとき、「私自身の存在は、それが他者にとって近づきやすいものになると同時に、私自身にとっても圧倒的かつまた持続的に近づきやすいものになり、私は意識的な内省作業によって妨害されることなく、自然に私自身に対応することができるようになる」(59)と述べられています。

**SQ** 言葉による体験の「類型化」や「匿名化」とはどういうことでしょうか。

まず、関連部分を読んでいきましょう。

「…ことばは柔軟性に富んでいて、私の生活過程のなかで生起する極めてさまざまな経験を対象化することを可能にしてくれるのである。さらにまた、ことばはこれらの経験を類型化する。…ことばが経験を類型化するとき、それは同時にまた経験を匿名化する。」(60)

本書での例に沿って考えると、義母と言い争いをしたという経験は、言葉で表現することにより、例えば、〈義母との不和〉というカテゴリーに組み込まれ、このことによって、類型化されます。つまり、同様の経験を持つ人全般に適用可能なものとなるからです。そしてさらに、この類型化は、特定の個人を要求するわけではなく、このカテゴリーに該当する人には誰であっても、使用可能となりますから、直接的で固有な主観性は剥ぎ落とされて匿名性を獲得することとなるわけです。このようにして、私の経験といったものが、言葉に媒介されることによって、「客観的にも主観的にも現実的である、一般的な意味の秩序のなかへたえず包み込まれていく」(60-61) わけです。

**SQ** 言葉の超越性について、空間的、時間的、そして社会的なそれぞれの次元で、説明しなさい。

言葉の超越性には、空間的、時間的、そして社会的な次元があると述べられていますが、以下の通り、説明できるでしょう。

空間的超越：言葉は私の領域と他者の領域との隔たりを超えることを可能にする。

時間的超越：言葉を用いることによって、私の生活歴の時間的構成を他者と共有、あるいは、同時化することができる。

社会的超越：私や他者が直接的に共有していない個人や集団について、他者と話し合うことができる。

そして、このような言葉の超越性は、日常生活を意味のあるものにするのに大変な力を持ちます。ことばのもとに、私たちは、日常生活の現実の中のさまざまな飛び地を「意味のある全体」へとまとめることが可能となるのです。

「ことばには〈ここといま〉を超越する力があるということから、それは日常生活の現実のなかにあるさまざまな異なった領域を架橋し、それを一つの意味ある全体へ統合する。」(61)

加えて、このような超越性により、言葉は、存在するものもしないものも、想像上のものであれ、さまざまな対象を、現前化させることができます。つまり、「…全世界はことばを用いることによっていついかなる時点においても実現され得る」(61-62) わけです。

**SQ** 言葉のこういった超越性は、わたしたちが常識的な世界を生きるためにどのように役立っているか、B&Lの記述に沿って説明しなさい。

まず第1に、このような言葉の超越性は、主に言語という記号による、さまざまな知識体系や文化体系、思想体系を構築することを可能にします。

「ことばはいまや別世界からやってきた巨人のように、日常生活の現実の上に聳立するかにみえる象徴的表象の巨大な建物を構成する。宗教、哲学、芸術、それに科学などは、歴史的にみて最も重要なこの種の象徴体系である。」(62)

そして、二つ目として、これらの象徴的体系を作り出すばかりでなく、それらの専門的体系と日常生活の間を取り持つ役割も果たします。言葉によって、私たちは、それらの象徴的体系と日常生活の間を行き来することができ、双方に循環的な変化と安定をもたらすことができるのです。

「ことばは日常経験から高度に抽象化されたさまざまな象徴を構成する能力があるばかりでなく、これらの象徴を日常生活のなかに〈還元〉し、日常生活における客観的に現実的な要素としてそれらを提示する力をもっている。」(62-63)

ことばは「言語的に境界づけられた意味論の領域」(63)、つまりは、科学であるとか宗教であるとかいうような、そしてさらに細かく言えば、物理学、生物学といった学問、そしてより細かく分割可能な領域に対して、一定の意味のまとまりを提供します。しかし、これらは、一人の人間のなかでは、バラバラに切り離されたものではなく、一つの意味論的領域を形作っている自分の専門領域の知識に、その人の個人的経験を関連づけることも可能なのです。

「こうしてつくり上げられた意味論的領域のなかにおいては、個人の人生遍歴

における経験と歴史的経験との双方を対象化し、保持し、蓄積することが可能になる。」(63)

このような対象化や蓄積は、個人及び社会の双方において選択的であり、それによって、日常生活における安定性を支えるものの一つである常識的知識というものが形作られていくわけです。

さて、これで、この3章の前半部、つまりことばを中心とした考察が終了し、後半部で議論される知識の社会的在庫の話に議論が移っていくこととなります。

**SQ** 日常生活の安定性を支えるものとしての「知識の社会的在庫」はどのように形作られ、日常生活でどのような作用をするのでしょうか。B&Lの記述に沿って説明しなさい。

ことばを媒介として、結び付けられた個々人の専門領域と個人的経験が、さらに世代を超えて寄り集まり、知識の社会的在庫が形成されていきます。

「こうした蓄積によって知識の社会的在庫が形成されてゆくのであり、それが世代から世代へと受け継がれていって、日常生活における個人にとって利用可能なものになるわけである。」(64)

この、社会成員によってある範囲でゆるく共有される知識の社会的在庫は、それぞれの構成員の間の相互作用の元となるとともに、その相互作用のあり方を決定してくることになります。この知識の社会的在庫の中には、例えば、自分が中流階級であり、年に数回程度の国内旅行は可能であるとしても、長期のプライベートな旅行に自家用ジェットで行くことはないだろうといった、自分が置かれている状況に関する知識も含まれており、こういった知識は、その社会全般で共有されています。しかし、それは、違う社会をとると、全く異なってくることも可能で、社会により「貧しさ」ということの意味合いが変化してきます。貧しさの文化的違いを決定づけるのは、知識の社会的在庫なわけです。そしてそれにまつわる知識も社会ごとに異なってくるのが通常です。このように、社会の知識的在庫によってのみ、諸個人の社会における〈位置づけ〉とその適切な〈取扱い〉が可能となります。

「それゆえ、日常生活における私の他者との相互作用は、利用可能な知識の社会的在庫へのわれわれの共同参加の仕方によって常に左右されるわけである。」(64)

知識の社会的在庫は、社会構成員間のことばや表現記号を通しての直接・間接的な相互作用により形成され、世代を通して引き継がれると共に、常に変化していくものでもあります。それでは、その構成はどうなっているのでしょうか。次はこれを見ていきましょう。

**SQ** 知識の社会的在庫の内部「構成」はどのようになっているか。B&Lの記述に沿って説明しなさい。

まず指摘してあることは、日常生活の知識は、機器の扱い方をはじめ、物の購入の仕方、道路法規など、ハウツウ的な知識が主流を占めているということです。

「日常生活がプラグマティックな動機によって支配されているという理由から、知識の社会的在庫のなかでは処方的な知識、つまりルーティーンの遂行における実用的な能力に限定された知識、が突出した地位を占めている。」(64-65)

ここで、例えば、スーパーでの買い物の仕方、スマートフォンの使い方、パスポートの申請の仕方やその調べ方などの知識は持っている一方で、スマートフォンがどのように機能するかについての根源的知識は必要としないことを押さえておいてください。

加えて、個々人にとって、知識の社会的在庫の中でも、親密性の高い分野と低い分野の区別ができます。知識の社会的在庫は、親密性の度合いに応じて、層をなしていると考えられます。

「知識の社会的在庫は現実をその親密性の度合いによって区別する。それは私がしばしば対処しなければならない日常生活のさまざまな部門に関して、複雑でしかも詳しい情報を提供する。それは日常生活により縁のうすい部門に関しては、これよりもっと一般的でしかも不正確な情報を提供する。」(66)

次に含まれるのは、類型化の枠組みです。第2章の社会的相互作用において、匿名性との関連で他者をめぐる類型化図式について触れていましたが、知識の社会的在庫には、そういった対面相手といった概念を超えた範囲の類型化の枠組みも含まれています。会議といった仕事の場面やスーパーマーケットでの買い物といった日常的なルーティーン、そして、スノーシューの装着方法やその手入れ方法と収納方法など、日常生活の遂行に関わる様々な類型化図式を持っています。

「さらにまた、知識の社会的在庫は私に日常生活の重要なルーティーンの遂行にとって必要な、類型化の枠組みを提供する。つまり、それはすでに論じた他者についての類型化図式だけでなく、社会的なものとの双方の分野における、あらゆる種類の出来事や経験についての類型化の図式を提供してくれる。」(66)

加えて、例えば、雪解けの季節とその際に関連して起こる道路清掃車の運行といった季節や天気に関する類型化や、季節ごとの火事の増減など、背景

的な知識までもが、知識の社会的在庫の中で類型化の枠組みとして提供されています。

「こうした出来事の自然的な〈背景〉もまた、知識在庫の内部において類型化されている。…さらにまた知識の社会的在庫は、自らを統合された全体として提示することにより、私自身の知識のなかのバラバラな要素を統合するための手段を提供してくれる。」(67)

このように、知識の社会的在庫は、統合された形で、わたしたちの日常生活の知識を提示するものの、この知識在庫が日常生活の全てを知り尽くしていることはありません。日常生活の現実は、常に、知られていない領域を背後に持ったものとしてあります。当然のことながら、私たちは、すべてを知り得るわけではなく、必要に応じて、必要な知識にアクセスしているにすぎないわけです。

「ところで知識の社会的在庫は日常的世界を統合された形で、つまり親しまれた領域と疎遠な領域にしたがって区別された形で、提示はするものの、この世界の全体は不透明なままに残しておくものである。換言すれば、日常生活の現実、常にその背後に暗闇をもった透明な領域としてあらわれる、ということだ。」(68)

知識の社会的在庫全体の外界線は不透明であり、それはどんなに小さい社会のまとまりを取ったとしても、明確に規定されるものではありません。

さて、ここまでの読み解きから知識の社会的在庫の構成をまとめておきましょう。

1. 知識の社会的在庫の中では、プラクティカルな知識が中心を占める。
2. 日常生活を中心に親密度の高い部門(=詳しい知識を提供)と低い部門が区別される。
3. 知識の社会的在庫は、日常のあらゆる種類の経験や事物に関する類型化図式を持っている。
4. また、さまざまな出来事と関連づけられる「自然的な〈背景〉」に関する類型化図式も持っている。
5. 知識の社会的在庫は、日常生活の現実の限界を規定する知識を含んでいない。

**SQ** そんな知識の社会的在庫の中で、特に重要なものとして、「有意性の構造」ということが述べられています。これは、どのようなものなのか、そして、それはどうして重要なのか、B&Lの記述に沿って説明しなさい。

まずは、関連部分を読んでみましょう。

「日常生活に関する私の知識は有意性（レリヴァンス）によって構成されている。こうした有意性のなかには直接的で実用的な私自身の利害関心によって規定されているものもあれば、社会における私の一般的な立場によって規定されているものもある。」(69)

これまで述べられてきたことからわかるように、日常生活に関する私の知識は、本書で有意性という言葉で示されているように、身近なものや疎遠なもの、関心のあるものと、関心のないもの、意味のあるものと意味のないもの、といったスケールで表現できるような軸や構造を持っています。

互いに話の合う人というのは、この有意性構造の重なる人と考えられます。つまり、AさんとBさんの有意性構造がXという分野で重なる時、そしてそれをAさんとBさんが認識した時、違いに共有すべき話題を持っていると考えることができます。これは、友人関係だけでなく、専門的な関係についても当てはまります。B&Lが述べているように、近代化された社会においては、主治医に投資問題を持ちかけたり、弁護士に腰の痛みの相談をすることはないので、これは、私が他者の有意性構造、つまり、医者ほどのようなことに関する知識を職業的に身につけているかといった、他者に関する有意性構造を持っているから可能なことなのです。

「日常生活に関する私の知識のなかで重要な要素を占めているのは、他者の有意性構造である。」(70)

有意性（レリヴァンス）とは、現象学の用語であり、関連性の意味で、第1章でみた、「まなざし」といった概念とも関連を持つものです。そして、他者の有意性構造に関する知識とともに、必要なのが社会全体としての知識の社会的在庫の有意性です。

「全体としての知識の社会的在庫もそれ自身の有意性の構造をもっている。」(70)

これは、大雑把にいえば文化といった言葉でも表現できるでしょう。B&Lが出している例のように、アメリカ社会においては、株式を考えると星占いは使いません。アメリカでの有意性構造における星占いの用途と他国(文化)での用途は異なるものですし、防犯や防災に関する基準と対応などにも、それぞれの社会の有意性構造により異なりが生じるでしょう。そして、ある文化を超えて、他国に旅したり、生活した時に、この総体としての知識の社会的在庫の有意性が突然、強く意識されたりすることがあります。カルチャーショックも、今まで無意識に持っていた有意性構造が、異なった社会で、その社会的在庫の有意性構造と齟齬を起こした時に発生すると考えることもできます。このようなことから、普段は無意識下にあり意識されることはありませんが、ある文化の中で生きていくときに、その文化の有意性構造を身につけていくことの重要性がわかります。

**SQ** 知識の社会的在庫の議論の締めくくりとして、「知識の社会的配分」ということに触れられています。これは、どのようなものなのか、そして、それはどうして重要なのか、B&Lの記述に沿って説明しなさい。

B&Lがこの章の最後で強調しているのは、社会の知識がそれぞれに固有な形で、社会的に配分されているという点です。例えば、複雑化する現代社会においては、病院の窓口やあらかじめネットなどで、どの科で受診すべきかについてのアドバイスがもらえるようなサービスがあります。これは、自分が苦しんでいる症状を解決するのに、どの診療科にかかれば良いかということさえも、もうすでに単純に判断できない時代になっているということです。専門家にアクセスするためには、専門家のアドバイスが必要であるということで、このような一般の人と専門家を媒介するような知識提供が増えているという現代の変化と合わせて考えてみることもできるでしょう。この知識在庫の配分についての知識は、知識在庫の中の重要な要素なのです。B&Lは次のようにまとめています。

「社会的に入手可能な知識在庫がどのように配分されているのか、ということについての知識は、少なくとも外形的には、同じこの知識在庫のなかでもとくに重要な要素をなしている。」(71)

知識には、それぞれの対象や状況に関する知識に加えて、類型化枠組み、そして、社会的に知識がどのように分配されているかという知識の分布に関する(類型化)知識が、少なくとも含まれているということがわかります。

これで、「第1部 日常生活における知識の基礎」の最後の章である第3章を読み終わりました。ただ、ここで気がつくことは、知識の社会的在庫の議論において、この知識がどのように書き換えられ、更新され、修正され、その類型化を変化させ、有意性を変化させているのか、という点には、本書ではあまり触れられていなかったということです。それがまさに、時代の違いを表しているのかもしれませんが、情報の役割、そして情報と知識の更新と変容の問題が、現代において最も重視されていることを考えると、この点からの知識の社会的在庫に関する考察が必要となっていることに気がきます。

(令和4年4月30日受理、令和4年7月26日採択)